

## INTERVIEW

自治医科大学 学長  
永井良三先生



# 研究・人材育成・地域医療で 社会貢献を推進する 自治医科大学の取り組み

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

## 質の高い研究活動を通じて社会に貢献する

山田隆司(聞き手) 今日自治医科大学に永井良三学長をお訪ねしました。1月号のインタビューでは大石利雄理事長に「自治医大のこれまで、現状、これから」について伺いましたが、今回は永井学長にご登場いただき、自治医大の今後の具体的な取り組みについて伺っていききたいと思います。

永井良三 自治医科大学は2022年に創立50周年を迎えました。人口減少が進む中、へき地の拡大は止まらず、国力も低下しています。そこで本学では改めて次の50年に想いを馳せ、教育、研究、診療、社会貢献を推進するために「自治医科大学将来ビジョン2060」を策定しました。長期目

標は、「変化し続ける未来の地球、社会や地域を見据え、医療と科学技術の進歩を担い、多様な場や人をつなぎ、広く地域の発展に貢献できる医療人を養成する」を掲げました。これを達成するための柱として、大学および大学院、附属病院・附属さいたま医療センター、地域医療学センターの3つを位置づけ、それぞれの連携の下、未来に向けた持続可能な地域医療への貢献に向け、人材育成、地域医療、社会貢献を推進するとしています。

また、短中期目標として、「質の高い研究活動を通じて社会に貢献する」も掲げました。自治医大の使命は、地域で働く医師や看護師を養成

するだけではありません。臨床教育だけでなく、研究も大学に課せられた重要な使命です。新しい医学の知識を作り、医療の現場に普及させるためには、社会の了解の下に研究を進める必要があります。

具体的には、今後10年間の本学の研究戦略として、次の3つの柱、1)独自性が高く、強みのある先端研究、2)地域医療研究、3)両者をつなぐ医療IT/AI研究、を考えています。

本学の独自性が高く、強みのある研究としては遺伝子治療があります。AMED(日本医療研究開発機構)との共同研究やAADC(芳香族アミノ酸脱炭酸酵素)を用いた遺伝子治療、強力なゲノム編集ツールなど最先端の研究が進んでいます。またピッグセンターの整備によってブタ研究・異種移植にも取り組んでいます。医工連携としては、黒尾誠教授が「リンによる老化」という独自研究から「リン除去カラム」を発明しました。創薬も進めています。こういった研究についてはもはや研究費だけでは追いつかないので、大学を挙げた事業として展開するよう提案しています。

次に、今お話ししたような独自性が高く、強みのある先端研究はもちろん重要ですが、それは他大学にもできることです。他大学にはない本学独自の強みはやはり「地域医療研究」です。自治医大卒業生は以前から全国でフィールド研究を行っていますね。

**山田** そうですね。私も義務年限で岐阜県の旧久瀬村に赴任しているときに、地域の仲間たちとプライマリ・ケア領域の研究をしていました。卒業生のネットワークでいろいろな分野の地域医

療研究ができると思います。

**永井** その通りです。30年以上前から卒業生を中心に始まったJMSコホート研究、JMSコホートII研究をはじめとして、現在多くの全国横断的なフィールド研究が取り組まれています。これは全国に卒業生を輩出し卒業生のネットワークが確立している、自治医大ならではの研究といえます。

加えて今後ますます重要になるのが、医療IT/AIです。自治医大では2017年にデータサイエンスセンターを学長直属部門として設置し、医療情報研究を進めてきました。これまでに全国の基幹病院の電子カルテデータを統合するCLIDAS研究や自治体のレセプト・DPC等の医療情報を縦断的なデータセットとして地域医療を面で分析する研究を主導してきました。

これらの学内固有の強みのある研究(ラボ研究)、全国横断的な研究(フィールド・地域社会)、情報学・情報基盤(IT/AI)という、臨床医学研究の3つのベクトルが有機的に連携することで掛け算のように展開すると思います。

これらの研究を推進するために運営体制の改革も提案しています。事業費を獲得できたら「自治医科大学医療イノベーション機構」を設立し、講座・研究室を超えて運営する体制を確立します。イノベーション創生プラットフォームとして、「分子病態治療イノベーション」(先端医療技術開発)、「医療AI・データベースサイエンス」(医療IT/AI開発)、「地域医療イノベーション」(地域医療研究)の3センターを組織しようと計画しています(図)。